

市長と語るタウンミーティング実施報告書

担当部	政策経営部
テーマ	日常と平和～くにたちから平和な世界を考える～
日時	令和6年6月23日（日）午前10時30分～午後0時00分
場所	矢川プラス みんなのホール
出席者	永見市長、松葉人権・平和担当部長、吉田市長室長、畠山児童青少年課長、鈴木平和・人権・ダイバーシティ推進係長、黒川児童青少年係主事、法坂児童青少年係会計年度任用職員
参加者数	52名
主な意見	<ul style="list-style-type: none"> <li>・長崎派遣事業等に参加し、体験者、伝承者の話を聞くほか、資料館で当時の服を実際に見ることで、歴史の授業や教科書ではわからないリアルな暮らしを知ることができた。</li> <li>・ウクライナやガザでの出来事をきっかけに、学内でも戦争や平和について考え話す機会が増えた。</li> <li>・毎年、8月になると戦争について考える機会があるが、自分とつながりがあるものとして捉えることは難しいことである。</li> <li>・体験者の高齢化の問題については、身近な方の体験を聞き、継承することが大事。</li> <li>・記憶を記録する。動画や、本、資料にまとめて多くの方に見てもらう。</li> <li>・大学通りのさくらの木に「平和」のポスターを掲示し、日常的に考えてもらう機会を創出する。</li> <li>・言葉だけでなく、戦時中の写真や服などを合わせてみることで理解が深まる。</li> <li>・多摩地域全体でも伝承者育成事業を広げてみてはどうか。</li> </ul>

課題等	・体験者の高齢化の問題については、身近な方の体験を聞き、継承することが大事。
-----	--

<当日の様子>





# 市長と語る タウンミーティング

## 日常と平和

～くにたちから平和な世界を考える～

令和6年6月23日(日)、矢川プラスで市長と語るタウンミーティングを開催しました。  
『共に生きていける平和な世界のために私たちに何ができるか』について、「子ども長崎派遣」に参加した中学生、市内で学ぶ大学院生とトークディスカッションを通して市長と意見を交わしました。  
当日の発言内容は個人の経験や見解に基づくものであり、市の公式見解ではございません。平和への様々な考えを認識しあう機会となり、平和について、みなさまにも考えていただきたく、当日の記録としてまとめたものです。



一橋大学大学院 社会学研究科 博士課程2年 **征矢 法子さん**  
一橋大学大学院 社会学研究科 博士課程1年 **小谷 英里さん**  
令和3年度 長崎派遣生 **中島 歩武さん**  
令和4年度 長崎派遣生 **高田 さやかさん**  
ファシリテーター 市長室長 **吉田 徳史**  
国立市長 **永見 理夫**

**市長**  
今日は若い人たちを中心に平和のあり方についてみなさんと一緒に考えてみようというところでタウンミーティングを開かせていただきました。

私は、一九四九年生まれ、昭和と言つと昭和二十四年、先の戦争が昭和二十年ですから、その四年後に生まれています。

本日の会場を見渡してみますと、東京大空襲を経験されている二瓶治代さん<sup>1</sup>は、「自身の戦争体験を伝承者へ伝承いただいています。二瓶さんは八歳のときに東京大空襲を経験されています。そういう意味では、ここにいる小学生、中学生や大学生、大学院生、その保護者の方々、そして私自身もそうです。戦争というものに対してのリアリティがものすごく違うのではないかと思います。

国立市は外交権がなく、自衛権もない中で、市民福祉の向上を目指すことを目的とする自治体において平和の問題を考えることはどういったことでしょうか。

そこ世代間の違いはあるかもしれませんが、決して戦争を行つてはいけない、人を殺してはいけない、そういう立場で、何ができるのだろうか。どうしたら戦争をなくすことができるのだろうかということをお話したらどうでしょうか。本日のタウンミーティングの目的です。

ですから、このあとみなさんそれぞれの年代から見て、こういう課題があるんじゃないか、こうあるべきじゃないかというところを積極的にお話いただくと、クロスの議論をできればと思います。

<sup>1</sup> 国立市在住。8歳のときに神戸で東京大空襲に遭い、その戦争体験を市内のほか、江東区北砂の東京大空襲戦災資料センター<sup>2</sup>で多くの方に語り続けている。

**一マ** 長崎派遣事業に参加して意識は変わりましたか。

**中島さん**

戦争の話は祖母の話を知りたけであまり知らなかったです。そこで、同学年の人と戦争について学べるということに興味を持って参加しました。

長崎派遣<sup>2</sup>に参加して、昭和館<sup>3</sup>に行つたり、伝承者の話を聞いて、戦争の恐怖や改めてこうして何気ない毎日が過ごせる日々<sup>4</sup>のありがたを歴史するようになりました。

また、歴史の教科書ではあくまでも歴史上の一つの出来事として客観的に戦争について書いてありますが、長崎派遣では実際に当時の一般市民の暮らしをリアルに感じることができ、平和は人々や国任せにしてつくれるものではなく、一人一人が意識してつくりだしていくのだと思いました。

**高田さん**  
長崎に行つたことがなく、派遣事業の存在を知って、家族旅行では派遣生同士の戦争や平和のお話や意見交換を行つたりということができるとも貴重な機会だと思ひ参加を決めました。

事前学習では、体験者の話を聞いた。資料館に行つたりしました。その中で印象に残つていたことは、資料館にあった血の付いた子ども服です。今まで歴史の授業の中で学んできたかと思ひながら、教科書の中で現実に帯びてきた戦争が急に現実味を帯びてきました。実際にあったんだということがわかり、すごく恐怖に駆られる交流を通して、今まで自分がかつた平和との向き合い方が知れて良い機会となりました。

**一マ** 伝承者事業の研究を通して感じたこと。

**吉田**

二人は、市の原爆・東京大空襲体験伝承者事業<sup>4</sup>のアドバイザーを務めていただいている一橋大学の根本雅也先生が社会調査の授業で、伝承者事業を研究されました。今回報告書をまとめる過程で伝承者にインタビューをされましたが、得られたこと等を教えてください。

**征矢さん**  
私が専門にしているフェミニズムやジェンダー研究は、これまでの学問の世界が男性中心であったことを批判し、女性や性的マイノリティの声を聴くことのために、テーマにきた学問です。そのため、データは少し異なりますが、実際に当事者の声を聞きとるということに取り組んでみたいと思ひ、このインタビュー調査に参加しました。

私は沢村智恵子さんという伝承者の方にお話を伺いました。沢村さんは、広島で被爆された平田忠道さん<sup>5</sup>と、東京大空襲の体験者である二瓶治代さんの体験を伝承しています。インタビューでは平田さんの体験の伝承に焦点を当てました。

当初、私にとって平田さんは見ず知らずの他者です。しかし、沢村さんのお話を伺う中で、出会ったことのない死者であったはずの平田さんが一人の人間として生き生きと立ち現れてくるということを経験しました。平田さんの思いを引き継いで語り続けることで、平田さんと共に生き続けている沢村さんの語りだからこそできることだと感じました。沢村さんの語り

<sup>4</sup> 市内在住の広島原爆・長崎原爆及び東京大空襲の体験者の体験や平和への思いを語り継ぎ、それを次世代に継承していくことを目的として市から委嘱を受けた「くにたち原爆・東京大空襲体験伝承者」が、市内内外で広く講話活動を行っている。

<sup>5</sup> 東京大空襲を経て、お父様が転動していた広島市北區。広島北部の可部で勤労動員の作業中に被爆。国立原爆被爆者の会<sup>6</sup>にたち校会にて副会長、二〇一九年一月逝去。



は「戦争体験を語り継ぐ人びと」  
「く」にたち原爆・東京大空襲体験  
伝承者「調査報告」で読むこと  
ができます。国立市内の図書館に  
所蔵されていますので、興味のある  
方はぜひお手にとってみてください。

### 小谷さん

私がお話を伺ったのは、永田一  
郎さんという伝承者の方で、長崎  
で被爆された桂茂さん<sup>7</sup>の被爆  
体験を伝承されています。

私は、反戦平和を求める活動を  
はじめとした社会運動に携わって  
いる方がどのような思いや考えと  
ともに取り組まれているのかとい  
うことに関心があるのですが、イ  
ンタビューは永田さんがごん葛  
藤や喜び、悲しみをめぐらせなが  
ら、伝承されているのを知ること  
ができる貴重な時間でした。

先ほど中島さん、高田さんが、平  
和活動に関わる中で、どのような  
気持ちの変化があったのかにつ  
いて話をしてくださいました。体験  
者の方のお話をみなさんで共有し  
て考えていくことも大事ですし、  
加えて、それを伝えていく方がど  
んな気持ちで取り組まれているの  
かという点を共有することもす  
ごく大事な点だと思います。  
今日いらっしゃる方も、なにかを  
きっかけに今後色々な気持ちの変  
化があるかもしれません。

吉田  
いま、お二人の話にもあった、報  
告書は、市内の図書館、公民館で  
見ることが出来ます。よろしけれ  
ば、お手にとりていただければと  
思います。

6 一橋大学の大学院授業「質的研究と方法  
(二〇二三年度春学期)を調査した学生生  
の希望者によって実施された調査の報告書  
7 長崎県立長崎中学校三年生のとき、勤労動  
員の作業中に長崎駅近の中心街を横断して  
国立原爆被爆者の会くくくくくくくくく  
て活動(二〇一七年八月近去)

そして、平田忠道さん、桂茂之さん  
のお名前が出てきました。お二人  
方は、国立市民の方で、お二人に加  
えて、二瓶治代さん、この三名の方  
の原爆体験、戦争体験を、国立市で  
は伝承することを取り組んでいま  
す。

### マ ー 同世代で平和や戦争につ いて話す機会がありますか。

### 小谷さん

友人とそういった話題を話すこ  
とは多くないですが、大学院では  
話す機会があるように思います。

最近では、ロシアによるウクライ  
ナ侵攻やイスラエルによるパレス  
チナでの虐殺など、テレビや新聞  
SNSで目にする出来事について  
友人たちと話しています。日本の  
戦争について考える機会があると  
思いますが、自分とつながりある  
ものとして捉えることは簡単では  
ないことだと思います。今回のよう  
に戦争や平和について考えたり、  
みんなで証言を読んだり、体験者  
の話を聞くなどできる機会があ  
ればいいと思います。その際には、背  
後に無数の死者がいて、語りた  
かったけれども、語れなかった存在  
がいることを忘れないことが重要  
であると考えます。

### 征矢さん

ロシアのウクライナ侵攻やイスラ  
エルのガザ侵攻以降、戦争の話を  
する機会が増えている印象があり  
ます。

一橋大学でも、停戦を求めるデ  
モやイベントが行われています。私  
も、一橋大学学生有志によって行  
われた「Pleas For Gaza」ガザに  
涙をこという企画に参加しました。  
イスラエルの攻撃によって亡くな  
られた犠牲者一人一人の名前を読  
み上げ、その方に思いを馳せなが

ら、白い大きな紙に、赤い絵の具で  
一粒の涙を描いていくというもの  
でした。人種主義、帝国主義、植民  
地主義などに対して、さまざま  
思いや問題意識を抱えて参加し  
ている方が多かったと思います。同世  
代の方たちの間でも、一人一人の  
尊い命が奪われたということに想  
いを馳せ、祈りを捧げる瞬間を日  
常のどこかで持つ方が増えている  
と感じています。

### マ ー 体験者の高齢化について。

### 吉田

来年、戦後八十年を迎える中で、  
その戦争体験の記憶ということ  
を考えると、当時中学生の方は、現  
在、九十代になるということ、こ  
の戦争体験の話をしていくと、体  
験者の方たちの生の体験、声を聞  
ける時期というものが一刻と短  
くなっていくことがこれから  
の課題になってくると思います。  
戦争を体験された方を目にするこ  
とができなくなる時代が間違いな  
くやってくるのが課題として言  
われていますが、実際に体験者の  
体験を伝えていくことについて、  
何かお考えのことかあればお  
話ください。

### 征矢さん

体験者のお話を聞かないこと  
はその体験を伝えていくこともで  
きません。私も祖父父母にもと  
戦争の話を聞いておくべきだ  
と思っています。もし身近に戦争を  
体験された方がいらっしゃって  
一度お話を聞く機会を設けてみ  
てもいいのではないですか。

吉田さんもおっしゃっていたよ  
うに、戦争体験者は少なくなっ  
ており、その体験を伝承した次の世  
代の方が語るという時代に来て  
います。今後はますます、伝承者の語  
りを聞いた私たちが、その語りを  
どれだけアリティをもつて受け  
止めるかということが問題に  
なってくると思います。私自身は、  
先ほどもお話ししたとおり、沢村さ  
んの語りに現れる平田さんと出会  
うということを経験しました。ま  
た、沢村さんも、生前の平田さん

から戦争体験を伺う中で、平田さ  
んの語りに、原爆で亡くなられた  
平田さんのお母様や弟さんが立ち  
現れるように感じたとおっしゃ  
っていました。亡くなられた人に関  
する語りに耳を傾けることで、そ  
の方をありありと感じ、戦争の恐  
ろしさを実感するというのでは可  
るのではないかと思います。

### 小谷さん

戦争体験の継承が大事だとい  
うことは、日々耳にするもの、なぜ  
大事なのかをみながら考える機会  
はあまりないかと思えます。しか  
し、なぜ継承する必要があるのか  
について考えることが非常に大事  
だと思っています。私の考えとし  
ては、過去を生きた人々の経験を  
知ることは、未来につながるこ  
ともあります。私たちが生きる  
今について考える上で重要だと思  
います。日本の侵略戦争や植民地  
支配の被害<sup>10</sup>を受けた方は、七十  
九年経っても苦しみを持ち続けて  
いらっしゃいますし、そのご子孫の  
方もそういいた痛みを継承されて  
いると思います。祖父父母など身  
近な人に被害者がいなかったとし  
ても、私たちがどこにいることを考  
えてみてはどうかというところか  
え、空襲で焼く野原になったと  
ころから復興した地に私たちが暮  
らしていると思えます。このように  
歴史と自分自身を線をつなげてみ  
ると見えてくることかあるかと思  
います。高齢化によってお話を聞  
く機会も減ってきてしましますが、  
過去の出来事や体験者と自分自身  
をつなげて考えてみることは、身  
近なところで想像力をめぐらせな  
がらできることかと思えます。

10 日本政府は、戦後五十年(一九七七年)の  
際、村山内閣総理大臣(当時)が「前略我が  
国は、遠くない過去の一時期、国策を誤り戦  
争への道を歩んで国民を存亡の危機に陥れ、  
植民地支配と侵略によって、多くの国々、と  
りわけアジア諸国の人々に対して多大な損害  
と苦痛を与えました。私は、未来に語り無から  
ず悔を与え、ここにあらためてこの歴史  
の事実を謙虚に受け止めること、あらためて  
痛切な反省の意を表明し、心からの謝罪の気  
持ちは表明いたします。また、この歴史がも  
たらした内外すべての犠牲者に深い哀悼の念を  
捧げます。(後略)と講話で述べた。また、  
戦後六十年(二〇〇七年)には、小泉内閣総理  
大臣(当時)が談話を述べている。

吉田  
二人からは体験を聞くことの  
大切さについてお話しください  
一方で、体験された全ての方がお  
話ができるわけではないと思いま  
す。

家族だからこそつらい体験を伝  
えられなかったという方もいら  
っしゃると思います。

国立市では大きな空襲の被害は  
あまりなかったと言われています。  
それぞれの地域での体験をお持ち  
の方がいらっしゃいます。例えば、  
多摩川沿いにB29が墜落して  
いくところを見たという方もい  
らっしゃいます。そのような体験  
を多くの方に伝え、残すことは  
やっていかなければならないと思  
います。

### 市長

それぞれの年代、研究テーマでお  
話いただきありがとうございます。  
日本は、一九四五年に終戦を  
迎えてから来年で八十年を迎えま  
すが、それから戦争を経験してい  
ません。僕の世代で言えば、生まれ  
てしばらくして、世界では、朝鮮戦  
争があり、ベトナム戦争、イラクで  
の戦争、アラブでの戦争もありま  
した。ここ最近で言うと、ウクライ  
ナへの侵攻も行われ、ガザでの人  
道支援の必要な状況も生まれて  
きています。



世界と日本の現状のギャップがあり、一九四五年に終わった戦争の悲惨さや命の大切さを伝承していくことの重要性は、今日みなさんが言っていたにいたっている通り、伝承だけでなく話を聞くこと、そのときの遺品を見ることによって、リアリティが全く変わってきて、教科書の文字の世界から現実の世界へ自分が入っていくということが重要だと思えます。日本は伝承し、語ってきた国なのかもしれない。身内を亡くされた方はどういことを思っているのかをほごんご聞かれることがないと思えます。親族の方が戦争で亡くなられた方とお会いするときに必ずおつしやるのは、「戦争はよっちゃいかんよ命は大切なんだよ。』とおつしやいます。ですから、身近な人を亡くした方の悲しみや苦しみということがもどうやって広く実感できるか。恐らく、遺族間のお話で今まで記録にとつたこともないです。まちの中で暮らしている方がどういう実感を持っているかということも、しっかり記録していくことが大事だと思えます。このように、今お話を聞いて思いました。

日本は明治史以来、十年ごとに戦争をやっていた国が一九四五年から八十年間直接的な戦争に巻き込まれていないことは大変なことだという風に実感を強く持ちました。

## マ 戦争体験を伝え続ける アイディアはありますか。

吉田 一ここからは会場の皆さまとも意見交換をさせていただきたいと思えます。会場には今年度の長崎派遣生のみならずにも来ていただいています。今日が第一回目の研修でタウンミーティングの前に伝承者講話を聞いていただきました。これから事前学習をして八月に長崎に行き、様々な体験や交流をされるそうです。今の段階で戦争

や原爆のこと。戦争を体験された方の体験をこれからも伝え続けていくためにはどうしたらいいのか、何かアイディアがある方がいらっしゃればお願いします。

## 派遣生

体験者の話しているところを撮影して、動画に残していくのはどうでしょうか。そうすれば、今後色々な人に伝えたいけるんじゃないかと思えます。

## 吉田

動画で残していくと、次の世代の方たちも見ることができるといいことですね。

## 派遣生

戦争体験者の体験を本に書いて、それを中央図書館とかに保管するのがいいと思えます。

## 派遣生

次の長崎派遣生も使えるようにスライドなどを資料に残しておくといいと思えます。

## 吉田

お二人はみなさんの先輩ですが、体験を動画に残す、本に残す、スライドに残してはどうかなどありましたが、今の話を聞いてどう思えますか。

## 高田さん

体験者の方の体験を本にしたり、動画にしたりすることはすくすくいいアイディアだと思います。歴史の授業で教科書に戦争のことを習うと思うんですけど、それは数値とかあくまで表面上のことだけしか書かれていなくて、実際にあったことをそのまま個人の視点で伝える方法が出たことはすくすくいいと思えます。

## 中島さん

体験者の方の話を動画や資料で残すというのすくすくいいと思えます。言葉だけで理解するよりも実際に戦争の悲惨な写真や実際に

そのときに着ていた服とか、銃で撃たれたとき穴の開いた鉄の部品とかいろいろとあると思うんですけど、そういうものとあわせて見たり、聞いたりすることで、より理解が深まると思えます。言葉だけでなく、実物も保管するのがいいと思えます。

## 吉田

他にも会場にいらつしやるみなさんで「体験を残すためにどういっていったらよいか。」についてご意見やご質問、お考えをお持ちの方がいらつしやれば、ご発言いただければと思います。

## 参加者

日本の経験じゃないと戦争の怖さを体験できないのかっていうことは常々疑問に思っています。今の世界を見るとウクライナで今も戦争をしていて、悲しいことですが、そういう経験が、無限に積み重なっていく中で、日本が経験した空襲や原爆でないとか我々は悲しさや共有できないわけじゃないと思えます。日本じゃないけど日本のことのように捉えるような舞台作りやコミュニケーションってものををつくりあげていくことが、八十年間戦争がなかった日本において一番身近な方法じゃないかなっていう風に考えています。

## 吉田

平和というテーマに関して、これまでは戦争と平和という形で話をしてきましたが、国立市として考える平和は、戦争とのつながりも当然ながらあります。日常と平和という言葉を使っても、私たちの日常生活の中で、日常が脅かされる状況、これは戦争もそうですし、自分に身近なところで、言つて、コロナ禍でも、日常の生活がどうなるか、日々不安にかられる生活を送ってきました。日常生活の中のものも含めた平和という考え方のあたりを視点を踏まえて、何かご意見、ご発言があればお願いします。

## 参加者

伝承者を育成する事業をやっているというところを被爆地以外で唯一、行っている自治体です。ごいことだと思えます。

昨日も伝承講話を聞きました。被爆者が語っているのも聞いたことがありますが、その人の生活が語り部の方を通して、リアルに投影されていきました。この事業をなぜやっているのか、これをほかの自治体でもやった方が良くと思えますが、他の地域にも広がっていくことを考えているのでしょうか。

## 市長

国立市にはくにたち桜会という会があります。被爆体験された方々が二度と自分たちのような体験を起してはいけないということで、活動されていきました。市がタイアップし、その思いを後世に伝えていかなければと事業が始まりました。

多摩地域では平和のネットワーク<sup>1,2</sup>を形成して、会議の中で伝承をどうしていくかと話し合われています。実際に、体験者ほとんどお亡くなりになられてきていて、今から新しく体験された方の伝承を探していくことはなかなか難しい状況になっています。多摩地域全体で取り組んでみたいというようなことが議論されている最中です。

## 派遣生

大学通りに桜を大切にしようというポスターが貼られています。それを平和や戦争をテーマにして、中学生や大人の方のポスターをたくさん貼っていくと戦争というもの、この間、この間なんたいうことがみんなでもわかるんじゃないかなと思えます。

1 国立市内在住の被爆者で作られた団体。地震が体験された原爆の話を市内の小中学校などで語る活動を行っていた。  
2 国立平和首長会議東京都多摩地域平和ネットワーク。東京都多摩地域で平和首長会議国立市に加盟している6市で構成。

## 市長

一つの方法として考えられるかと思えます。大学通りを大切に思っている人たちの思いを、七千人の七万六千通りあつて、共通的に認識されているのが、さくらやイチヨウを大切にしようということ。そして緑地帯を大切にしようということ。平和は共通項でくくれると思えます。平和の問題は共通項でくりかえされるかどうかが大学通りという場でできるかというのは色々な意見と意見交換をしないですぐには難しいことだと思えます。思いはものすくすく大切なことだという風に受け止めております。ありがとうございます。

## 吉田

他の自治体では、平和に関するポスター展をやっているところもありますので、今のアイディアはすくすく素敵なアイディアだと思えます。

## 参加者

自分が大学に通っていて、戦争に関して話す機会があるかという話が出ていたかと思うんですが、個人的な意見にはなりませんが、みな知識は持っているけど、そういう意識はないのかなと思っています。伝承を残す、またはこういう人も平和について考えている人たちや意識を持った人たちが集まりやすい形になっていると思うんですけど、そのような状態から意識がない、興味がない、自分が関係ないと思っている人たちにに対してどういったアプローチをされているのか、どういったことが大切なのか、気がなりました。

## 市長

中学、高校、大学と進んでいく中で、自分の思考の対象はどんどん抽象化されていくと思えます。抽象化されるといことは、戦争や平和という概念が、インタビューを聞いて、実相をいかに伝えていくかという部分ともう一方で非常に抽象化された概念としてどう捉えていくかっていう方へど



んだん観念が昇華していくと思えます。どうにかということ、大学生や大学院生の間っていうのはそういう昇華していく部分がある。意識として強く、例えれば平和が持続されないの、どうするかというところを学問的に昇華された世界で研究してみようとか、そういうところへどんどん若い世代の意識が高くなっていくのが普通だと思います。

生活文化の中に、戦争や平和っていうのをどう位置付けていくか。今、質問があったように、暮らしている中で、そういう文化を獲えながら、個人がいかに平和を獲得しているのか。もつと言えれば人類はなぜ戦争をするのだろうかということ。ろまで昇華していった、解決の道をもつ一方では探してみる。市役所ができることは、生活文化の中にどういう風に根差してやっていくのかということ。そこは、本当に入っていくにくい部分があると思います。関心の強い人たちが集まるんじゃない、生活文化の中で、日常の中に何を考えようかということをいかに定着させていくかということ。さらには市役所も考えていかなければならない。そういう指摘をいただいたと僕は受け止めてさせていただきます。

### 参加者

誰かに教えたりするときも、関心をもっていないと、見え方は違っていて、そういう場合には、制度や機会を根付かせることが大事だと思えます。そこが変わること、意識も変わります。次第に制度も変わってくると思います。そういうことを根付かせることはすごく必要だと思います。

### 吉田

意識という話がありました。先日、長崎の若い世代が行っているところある取組を知りました。八月九日十一時二分、長崎の中でもこの時間のことを意識する方が年々減ってきているということ。危惧しているところを、アイディアの中で、LINE上で記録されて

いる方に、五分前に「まもなく、この時間です。」というお知らせする「アイディア」をネットで知りました。意識をいつも持てない、持っている環境にない状態の人たちに平和について考えてもらうかということ、すごく大切なことだと思えます。この戦争のこと、もうすでに、日常の私たちの生活の中のこと、そうだと思います。征矢さんと小谷さん、これまでのやり取りを聞かれて、何か「ぞい」しますか。

### 征矢さん

先ほど先言いただいた方の質問に対する直接的な回答にはならないかもしれませんが、沢村さんから伺ったお話を伝えておきたいと思えます。沢村さんは、伝承講話によって人々の戦争や核に対する意識をすぐに変えることはできないだろうとおっしゃっていましたが、ではなぜ、それでも伝承講話を続けているかということ、いつかどこかで芽を出す時が来るんじゃないかと考えています。征矢さん、お話を聞いてくださいますか。

沢村さんは平田さんの体験を聞き取る中で、「戦争を直接経験してきかない自分が、平田さんの戦争体験を語り継いでいくことができない」と悩んでおっしゃいます。実際にインタビューでも、平田さんの体験を完全に理解したとは絶対に言えないとおっしゃっていました。しかし、沢村さんも、大切な人を失った悲しみを経験しておられます。平田さんの体験そのものを理解することはできなくとも、沢村さん自身も自身の経験と戦争によってある日いきなり日常が奪われた平田さんの経験はどこかにつながっている、自分なりにわかるものがあるとおっしゃっていました。体験そのものは理解できないが、大切な人を失う経験はないほうがいいことですが、人生ではいろいろなこと

が起こりますので、そういった経験をされる日があるかもしれませんが、そのときに、今までまかれていた種が何かしら形が残って芽を出すとすることがあるのではないかと思えます。ですので、種をまき続けることや語り続けることが重要だと思います。

### 小谷さん

今回は戦争体験のことでしたけれども、あらゆる暴力や抑圧、差別に対して、問題によって身近に感じる場合や、少し遠い問題として感じます。これまで出た意見は、自分とその問題との距離がどうやって縮んでいくかということを考えて聞いていました。先ほど「提案くださった、せくらの木に例えば平和をテーマとしたポスターを展示してみよう」ということは、素敵なアイディアだなと思えます。必ずしも戦争のことを考えまじやうという場所ではないところに様々な仕掛けをちりばめることで、とても思いがけない遭遇を生むことは大事だと思っています。

私が普段活動していることを少し紹介します。長崎で反戦・平和を求める活動に関わっている方がどういった経緯でそういった取り組みをおこなうようになったのかについて聞き取りを行っています。たまたまポスターをみかけたとか、友達のおじいちゃんの話聞いたのがきっかけだったり、必ずしも学校での勉強ばかりがきっかけではないことがわかりました。日常のささやかなところで、思いがけない遭遇の種を拾うことがあったりすると思えます。先ほど、征矢さんの変化が必ずしもスピード感をもって進むものではないかと思えます。呼びかけを聞いてすぐやってみようということではなく、例えば、今日のよな会に出席して五年後、十年後に、そういう経過という話を聞いたなどという

ことを思い出したり、そういうさやかな仕掛けの影響で自分の中で、いつか生きてきたりする瞬間があるのかなと思うので、さきほどのアイディアがとても素敵だなと思いました。

### 吉田

種をまくといった話がありましたが、国立市の伝承者事業は平成二十八年度から市内の施設で講話をはじめたんですけど、延べで一万人以上の方々に聞いていただいているんです。そうやって体験の話や聞いた方が受け止めたことをどなたかにまた話をしていたことも、もつと広げていただくと、すごく大切なんじゃないかなと思います。

先程、広島や長崎に行かれたことがありますが、聞いたときに、結構な数の方が手を挙げていただきました。例えば、修学旅行で行かれたという方もいるかと思いますが、年々修学旅行で行くことが減っているようです。広島市の方と話をすると、特に関東圏からは距離の問題で難しくなっていることでした。今日、長崎派遣の保護者の方も来ていただいています。お子さまが応募する際、お家ではどういたや取り取りがあったのか。日頃からすごく関心があったのか。それとも六年生になったら行くか、それと聞いていたのか。そのあたりを教えてくださいませんか。

### 保護者

去年、学年の違うお友達に参加していて、興味があり、長崎に行ってみたくてということで応募しました。本人がどこまで戦争について捉えているかは未知数で、私自身も修学旅行で広島島の資料館に行き、すごく勉強になったと思っています。どちらかというと広島の方が身近で、長崎については私自身もよく知らないところだったので、今回長崎に行くこと、私も子どもと一緒に勉強させて、私にしたいなと思っています。

### 参加者

夫の転勤の件、五十二歳でアメリカに行き、大学院の門をたいて、五十五歳で修士を、五十八歳で博士課程に入って、六十歳で博士号を取得しました。私の専門は多文化共生です。私の考えでは、世界中の小、中、高、大学が異文化理解、多文化共生を教えれば、戦争はなくなる。それが私の考えです。

### 吉田

今日会場には、戦争体験をされた二瓶さんに来ていただいています。東京大空襲を八歳のときに体験され、伝承者の育成やご自身も学校等で体験を語られています。これまでの話を聞いて、感想とがありましてらお願いします。

### 二瓶さん

今までの話を聞いて、感心ばかりしています。先程、死者の思いを伝えるということをおっしゃっていましたが、それが伝承の基本だと思っています。私は直接の体験者です、死者というのは死んでしまっているの、自分のことは言えません。あの時、多くの方が亡くなりました。足の踏み場もないほど死者が転がっていました。そういう姿を思い出すと、この人たちは何を思っていたんだろうって思いつながって、それをみなさまにお話ししています。

私も友だちも当時八歳でした。前日まで仲良く遊んでいました。明日遊ぼうねって別れたそのお友達が、数時間後にあの空襲に遭って、みんな死んでしまいました。ですから、その人たちのことを思うと、みんな自分が数時間後に死ぬんだなって思わなかつたと思うんですよ。みんなもつと生きているかっただけなんです。そういう思いを想像しながら自分に重ねて伝えていくことが大事だと思っています。先程、すごくいいお話がありました。私たちは空襲体験を記憶として

持っています。でも、記憶というのはその人がなくなっちゃうとそれと同時になくなっちゃいます。それを記録に残していくことが大事だと思っています。記録に残しただけではだめで、それを読んだだけ方、見てくれた人たちが感じたことを違う人にちよつとでも話してもらって、それがとても大事だと思っています。それをやってくれたのが、国立市の伝承者活動だと思います。これはとても素晴らしいことです。

こんなことがあっても、私の体験を聞いてくださる方がいらつしやれば、お話に出かけたかと思っております。先程、さくらのところにポスターを掲示するアイデアを出してくれましたが、いいお考えだと思いました。

実は、国立市には素晴らしい平和宣言がありまして、国立市役所だけでは人の目につかなくて、国立駅のロータリーの真ん中にある素晴らしい平和宣言を置いていただいき、みなさんに見ていただきたいなと思っております。

私たちの伝えていくことがとても大事なことだと思います。国立市のユークリブに最近、講話が発表されていて、私の体験講話がある戦災資料センター<sup>15</sup>にも動画を二瓶さんの話を聞きたいとインタビューに来てくださいます。大学生の方が結構いらつしやつて、これからも予約が入っています。そうやって、知らず知らずのうちに大事だと思えます。受け止めてくれる人がだんだん増えていっている。そういうことは日常ではわからないかもしれないけれど、実際に最近の情勢を見ていると、危ないと思っている方もいらつしやるんじゃないかと思えます。

先程、市長さんもおっしゃっていましたが、八十年間、日本は戦争をしていません。それは世界でも本

14 二〇〇六年六月、新しい世紀を迎えるにあたり、平和への強い意志を広く世界に発信しようとして、国立市平和都市宣言を制定。  
15 民間の学術研究機関である公益財団法人政治経済研究所の付属博物館。

当に珍しい。先進国の中ではスイスと日本くらいと言われています。素晴らしいことですが、なぜ八十年間も続けられたのか。そういうことを考える時代だと思えます。戦災資料センターでも伝承者の育成を始めました。

長崎派遣生の皆さんは私の戦争体験を聞いて、長崎の人たちに訴えかけたそうです。こういうことがとても実りのあることだと思います。

長崎の人たちは、もしかしたら東京に空襲があったことを知らない人がいっぱいいるかもしれないけど、東京でも原爆や放射能の被害はなかったけれども、それと同じように戦争で大勢の人たちが亡くなつています。戦争は何なのか。その中でどうして死んでいかなければならなかったのか。そういうことを考えるきっかけになると思っています。

また、今日はこんなことを聞いた、こんな話をしたことを友だちや家族と話してみることで、だんだん広がっていくんじゃないかと思つていました。

長くなりましたが、私の子どもは六十歳近くになりますが、その子どもが小学校、中学校のときに教科書に戦争の話が全く掲載されていませんでした。ですから、私は自分の子どもに戦争の時代のことを聞かれたことがあります。

その頃は、高度経済成長期で、日本はもはや戦後ではないという風潮に言われていました。戦争のことが教科書に載りはじめたのが、一九七〇年の終わり頃だったそうです。それは一橋大学の名誉教授である、戦災資料センターの館長の吉田裕先生が調査したことをお伝えします。一九七〇年代に戦争のことが教科書に掲載されたかというところ、東京空襲を記録する会が中心になり、早乙女勝元さんが、東京大空襲戦災史を出版しました。それが広がっていき、こんな大事なことが教科書に掲載されてい

いのはなぜだろうと市民運動が起こり、掲載されたそうです。

そのときには息子たちは学校を卒業してました。今、若者と呼ばれる人たちは親から戦争体験を聞いていない世代です。だから戦争の時代を知らないというのは、当たり前だと思えます。ですが、実際には、戦争は行われています。戦争の実態を知り、記録を読んで、ユークリブを発信を見て、戦争への想像力をもつてほしいです。戦争はほんとうのものだったのか考えることは大事だということだと思います。

### 吉田

ありがとうございます。二瓶さんのお話にもありました。国立市の公式ホームページで体験動画のほかに、ショートバージョン動画もありますので、ぜひご覧いただければと思います。

### 参加者

本日は、長崎派遣の子どもたちもいらつしやっていたので、子どもたちにもお伝えしたいと思いい意見を述べさせていただきます。先日、沖繩の記録映画を見ました。だんだん戦争が忍び寄ってきていることを子どもたちにも知らせたいです。平和を崩すと取り戻すのが大変です。広島、長崎のことがありましたが、沖繩でもそういう現実があったことを伝えたいです。

### 吉田

ありがとうございます。では、最後、市長よろしくお願ひいたします。

### 市長

今日短い時間でしたが、本当に色んな意見を承る事ができました。大学院生、長崎派遣のOB・OGの方も貴重なお話をありがとうございました。

多様性の問題、あるいは記憶を記録すること。亡くなられた方への思いをいかに伝えていくのかなど、いくつもキーワードがあったかと

思います。実は有名な話ですが、一九三二年に、第一次世界大戦が終わった後、第二次世界大戦が始まる前にナチスドイツがどんだん台頭していく時期に、アインシュタインがフロイトに、人間は戦争のくびきから解放できるか。という問いを發しました。二人ともユダヤ人です。この文章が本の中に出てきますが、ナシヨナリズムを持たない私たちがどんだんナチスが台頭していく中で、命の危険を感じながら、亡命してしまつた。人々はなぜ戦争をするのか。人間は戦争のくびきから解放されることはあるのかという超有名な物理学者がフロイトという心理学者へ問うたときに、結論は、九十年も前のことなんですけども、フロイトは「ない」って答えているんです。けれども、文化の中に唯一、光が見えるということを答えているんです。すなわち、民族の問題、あるいは国家体制の問題、自由の問題、平等の問題、様々なことが問われていて、そこに差別の問題や多様性の問題とか様々なことがありますが、最後は国際的な中において人々が新たに文化を形成する以外に、このくびきから逃れることはないんじゃないかというのをこの本の中で書いています。その文化ってなんなんだっていうと、いまこの国立市でやつていることは、伝承など、そういう文化をつくるって承ることだと思います。そして、その痛みや死者の思い、悲惨さを文化として築いていくことしかないんじゃないかと思ひます。

思ひます。それは有名な話ですが、一九三二年に、第一次世界大戦が終わった後、第二次世界大戦が始まる前にナチスドイツがどんだん台頭していく時期に、アインシュタインがフロイトに、人間は戦争のくびきから解放できるか。という問いを發しました。二人ともユダヤ人です。この文章が本の中に出てきますが、ナシヨナリズムを持たない私たちがどんだんナチスが台頭していく中で、命の危険を感じながら、亡命してしまつた。人々はなぜ戦争をするのか。人間は戦争のくびきから解放されることはあるのかという超有名な物理学者がフロイトという心理学者へ問うたときに、結論は、九十年も前のことなんですけども、フロイトは「ない」って答えているんです。けれども、文化の中に唯一、光が見えるということを答えているんです。すなわち、民族の問題、あるいは国家体制の問題、自由の問題、平等の問題、様々なことが問われていて、そこに差別の問題や多様性の問題とか様々なことがありますが、最後は国際的な中において人々が新たに文化を形成する以外に、このくびきから逃れることはないんじゃないかというのをこの本の中で書いています。その文化ってなんなんだっていうと、いまこの国立市でやつていることは、伝承など、そういう文化をつくるって承ることだと思います。そして、その痛みや死者の思い、悲惨さを文化として築いていくことしかないんじゃないかと思ひます。

### 吉田

では、今日いただいたみなさまからのアイデアやご意見、これは市の平和の取組にも生かしていきたいと思つております。ありがとうございます。

それでは、本日、ご登壇いただきました中島さん、高田さん、征矢さん、小谷さん、改めまして大きな拍手をお願いします。ありがとうございます。



みなさま、ご参加いただきまして  
ありがとうございました！